

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2020.3) 令和元年度:10.

重症虚血肢の潰瘍における陰圧閉鎖療法長期化の要因の検討

日野岡 蘭子, 古屋 敦宏, 内田 大貴, 菊地 信介, 柝窪 藍,  
竜川 貴光, 東 信良

## 重症虚血肢の潰瘍における陰圧閉鎖療法長期化の要因の検討

旭川医科大学病院 看護部 ○日野岡蘭子

旭川医科大学 外科学講座 血管外科 古屋敦宏 内田大貴 菊地信介 柄窪藍 竜川貴光 東信良

＜背景＞陰圧閉鎖療法(Negative pressure wound therapy;NPWT)は、現在創傷管理の臨床場面で広く使用され、創傷治癒期間を短縮する効果が多数報告されている。NPWTの保険償還期間は最長28日であるが、重症虚血肢(Critical limb ischemia;CLI)においては、入院当初より広範囲の組織欠損を生じ骨髄炎等局所感染を併発している症例が多く、血行再建後も創傷治癒遅延を来すことから管理に難渋する。このような症例ではNPWT実施期間が28日を超過せざるを得ない症例が多く大きな問題と考える。

＜目的＞NPWT長期化の要因を抽出しNPWT期間短縮に至るための方策について検討する

＜方法＞血管外科病棟で2016年12月から2018年6月までの間で、CLI症例における足部潰瘍に対しNPWTを実施した患者62名のうち、最長28日を超過して実施した患者35名と28日以内で治癒を確認し実施を終了できた27名で長期化に関与する要因を抽出、比較検討した。

＜結果＞骨髄炎ありは46例、無しは16例であった。使用期間が28日を超過した35例では、骨髄炎ありが31例で骨髄炎なしは4例のみであった( $p<0.01$ )。骨髄炎ありの平均使用日数は51.2日、なしでは21.6日。透析は28例で45.2%であった。さらにアルブミン値では骨髄炎ありが平均2.52g/dlであったのに対し、なしでは平均3.06g/dlであり骨髄炎症例では栄養管理に難渋する症例が多いことが伺えた( $p<0.1$ )。また、入院時足趾を超える広範囲の感染壊疽を認め、切除範囲がショパールを超えた症例29例の平均日数は52.2日であった。

＜結語＞骨髄炎を有する症例は、管理に難渋し創傷治癒遅延を来すことからNPWT実施期間が長期化する傾向があった。入院当初に足趾を超える壊疽を認めた場合は、血行再建後の切除範囲が広範囲となり治癒に時間を要することから、感染壊疽に至る前段階で、血行再建を含む適切な治療と早期からの栄養管理が必要であることが示唆された。